

## 2 吉田能安先生が桜美林大学弓道部の師範に就任された経緯について

弓道部創設に当たり、吉田能安先生が師範に就任された経緯については、『吉田能安先生を偲ぶ』（平成三年、紫鳳会刊行、非売品）に、私が寄稿してあります。以下はその拙文であり、この一文を持って、師範就任の経緯内容説明に代えさせて戴きます。

<注意：以下は「吉田能安先生を偲ぶ」（平成三年紫鳳会刊行）に書かれたものです>

### 「吉田先生と三戸、そして桜美林大学」

山崎 誠

吉田先生が初めて三戸にお出でになられたのは、今から三十三年前の昭和三十四年のことでありました。当時私は八歳、小学校三年生で、父親（故山崎廣、大日本武徳会青森県支部長）から弓の手ほどきを受け、半弓を引き始めた頃です。その半弓は、盛岡の朝岡蕃先生（範士八段、元岩手県弓道連盟会長、阿波門下生で吉田先生の弟弟子に当たる）からお借りした黒の塗り弓で、大変由緒あるものでした。その弓を持ち、吉田先生から初めてご指導戴いたことを、今でも鮮やかに記憶致しております。

吉田先生ほどの高名な大先生が、何故青森県の、しかも片田舎である三戸へご指導にお出でになられるようになったのか興味が有り、父の存命中にその経緯を聞いたことがありました。

それによりますと、父がその年仙台での段級審査に出かけた折、控え室で武徳会の会報をお持ちの方がおり、お借りして読んで見たところ、その弓道理論、弓道思想に感銘を受け、早速住所を控え、お手紙を差し上げて武徳会入会を請うたそうであります。折り返し、直接会いたい旨のご返事を戴き、三戸訪問が実現、それ以来ご指導、ご厚誼を戴くようになったとのことでありました。

最初にお出でになられた日、父は小さな私の手を引いて、三戸駅まで吉田先生をお迎えに参りました。その時ご一緒にお迎えに出られたのは、父の顧問格であられた長岡先生（龍川寺住職）・志田先生（熊野神社宮司）・藤沢先生（初代三戸高校師範）・佐藤先生（歯科医元三戸町教育委員長）の諸先生方でした。皆さん威儀を正され、緊張された様子が子供ながらも分かり、懐かしく思い出されます。これらの方々も全て故人となられ、当時の様子を知る者は私一人となってしまいました。

その後、父が中心となり、吉田先生の主宰される大日本武徳会の青森県支部が結成されました。最盛時には、三戸地方はもとより、岩手県北、津軽の深浦町からも同士が集まり、支部員約百五十名を擁しておりました。

翌昭和三十五年には自宅に、父が私費を投じて廣楓館弓道場（五人立ち）を建設。それまでは、近くのお寺や神社の境内に仮設したものばかりであっただけに、皆さんから大変喜ばれたものです。このように、父は吉田先生に心酔し、弓道を愛し、弓道に情熱を懸けておりました。弓道を愛し、弓道に情熱を懸けておりました。

毎年夏になると、吉田先生をこの廣楓館弓道場にお迎えし、ご指導を戴きました。当然のように、この廣楓館が吉田弓道信奉者の拠点となり、ここで育った数多くの名射手が、吉田弓道の流れを汲む者として、誇りを持ち、全国各地で活躍しております。また、多くの吉田門下生の方々に、夏合宿の場として、この廣楓館をご利用戴きました。日比谷高校、学芸大学附属高校、法政一高の皆さん方でありませう。

このような環境で育った私も、自然何の抵抗もなくこの道に進んだのであります。そんな私に、一大転機が訪れました。それは昭和四十四年、桜美林大学に入学したことに始まります。当時、桜美林には弓道部はなく、私はアルバイトに明け暮れていましたが、これではいけないと弓道部創設を決意したのであります。父に相談したところ大変喜び、吉田先生に師範就任を要請、快諾を戴きました。また、弓道部創設のポスターを掲示したところ、相馬教授（旧制桐生高校において、阿波先生門下生で吉田先生の兄弟子に当たる、神永先生に師事）が自ら部長就任を申し出られるという幸運にも恵まれ、事はとんとん拍子に進み、桜美林大学弓道部が創設されたのであります。

この桜美林での弓道は、私にとってまさに革命的なものであります。八歳から弓を始めたとはいえ、それまでの弓はまさしく邪道であったことを思い知らされたのであります。おそらく吉田先生は、将来の三戸のことを考えられ、特に私を厳しく指導され、鍛えられたものと解釈致しております。私の今日あるは、吉田先生の熱情あふれるご指導のもとに、桜美林大学弓道部創設に係わることができた幸運と、そこで学んだ本物の弓道によるところが、大であります。

そんな私も、吉田先生をはじめ、諸先輩方のお力を得て、人生の折り返し点にようようたどり着き、現在では、三戸地方の弓道会をまとめる重要な立場に立たされております。この度の吉田先生の七回忌に当たり、先生のご恩に報いるためにも、思いを新たに吉田弓道の確立を目指し、更に一層の努力精進を、ご仏前にお誓い申し上げる次第であります。

（注：平成三年に寄稿、当時は青森県立南郷高等学校教諭）

上の拙文に書き忘れた、三戸での吉田先生に関する印象深い思い出を紹介します。

中学時代：先生は的前に立ち、会に入ると目を閉じられました。鋭い離れと共的的中音。

「すごいな、この先生は的を見なくても、中てれるんだ。」と。

高校時代：先生は的前に立ち、会に入ると顔を、審判席にいる父や高段者の方々、そして後ろ控えの間に正座する学生に向かって、「離れは、親指を鋭く上に跳ね上げればよい」と言いながら離すと共的的中音。見学している一同、またもや「すごい！この先生は顔を後ろに向けても、中てれるんだ。」と。